

機関番号：22304

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009 ～2010

課題番号：21792228

研究課題名（和文）がん看護に従事する看護師に対するピアサポートプログラムの開発

研究課題名（英文）Study on Development of the peer support program for a nurse engaging in cancer nursing

研究代表者

樋口 友紀（HIGUCHI YUKI）

群馬県立県民健康科学大学 看護学部 講師

研究者番号：20341802

研究成果の概要（和文）：がん看護に従事する看護師のピアサポートの実態とニーズを把握し、看護師支援策を検討した。その結果、看護師は、ピアから肯定的に受けたと知覚した支援内容を実践しており、看護師のサポート知覚を促進する支援の必要性が示唆された。また、ピアサポートの促進には、ピアが相互支援できる環境整備とともに、看護チームメンバーとしての自覚を高め、サポートの行動化を動機づける教育的支援の充実とサポートリーダーの育成支援が必要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：We examined nurse support measures in order to clarify the actual situation and needs regarding peer support for nurses who provide cancer care. The results showed that nurses perceive that the support they provided is positively received by peers, suggesting the need for support measures that promote a sense of support in nurses. The results also suggested that, in addition to creating an environment in which peers can provide mutual support, the promotion of peer support should include comprehensive educational support that motivates nurses to actualize support measure and increases self-acknowledgment by nurses that they are members of a nursing team, as well as training support for support leaders.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：がん看護、看護師、ピアサポート

1. 研究開始当初の背景

医療技術の高度化や医療システムの複雑

化に伴い、看護を取り巻く環境は量・質ともに変化している。また、がん患者の QOL 維持

向上に重点をおいた施策により、がん看護に従事する看護師は、複雑化する対象のニーズに対応し、より専門的な知識・技術に基づく質の高いケア提供が期待されている。

一方、がん看護に従事する看護師は、患者が体験する様々な意思決定や症状、家族支援などの複雑で困難な状況に向き合うことも多く、倫理的な側面も含めた役割葛藤を生じやすい特徴がある。そのため、がん患者・家族の看護支援を担う看護師に対する多角的な支援は、質の高い看護を迫及する上でも必要かつ、重要な課題といえる。

看護師支援に関する研究では、ソーシャルサポートの有用性が示され、特に、ピアからの支援の有無がメンタルヘルスに有意に関連し、ピアサポートの重要性が報告されている。しかし、がん看護における看護チームのピアサポートに着目した研究は少なく、チームが支持的に機能するための具体的な方策は明らかにされていない。

看護は、患者や家族との相互行為により機能し、多職種を含めたチーム連携で成り立っている。なかでも看護チームは看護師にとって最も身近で、がん看護という同じ体験を共有する仲間が、質の高い看護を目指し協働するチームでもある。そのため、ピア同士が支持的な看護チームであることは、実践する看護の質に影響するだけでなく、がん看護に関わる人材の均てん化の促進要因となり、がん医療の質向上とともに患者のQOL向上に貢献することが期待できる。

以上により、がん看護に携わる看護師が、がん患者や家族の看護を実践するなかで、看護チームが支持的に機能し、チーム力の向上に貢献できる支援策を検討する必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、がん看護に従事する看護

師のピアサポートの実態と看護師チームのピアサポートニーズを把握し、ピアサポートプログラムの要素の抽出、およびプログラム試案を作成することである。

(1) がん看護に従事する看護師が認識しているピアサポートの実態を把握するために、がん看護に従事する看護師が「ピアから提供された」と認識しているサポート内容および「ピアに対して提供した」と認識しているサポート内容を明らかにする。(実態把握)

(2) がん看護に従事する看護師が、看護チームのピアに希望するあるいは期待するサポート内容や課題などのニーズを明らかにする。(ニーズ把握)

(3) (1)(2)を通して、がん看護に従事する看護師のピアサポートを促進するための要素を抽出し、看護師支援策を検討する。

本研究ではピアサポートを、「看護師という社会的立場と、“がん患者や家族の看護”という役割機能の共通性に着目し、個人の年齢や役職、経験年数に関わらず、“がん患者や家族の看護”という共通の経験をしているピアとの肯定的な相互交渉」と定義し、サポートのポジティブな面を捉える。

3. 研究の方法

(1) ピアサポートの実態把握

① 対象：がん専門病院において、がん患者・家族の看護に従事している看護師のうち、調査の趣旨を説明し、同意の得られた19名。

② データ収集方法：データは、看護チームのピアから提供されたと認識しているサポート内容と、ピアに対して提供したと認識しているサポート内容について半構成的面接調査により収集した。

③ 分析方法：面接内容を記述データに整理し、内容分析の手法を参考に、質的記述的に分析した。また、形成されたカテゴリー・サブカテゴリーそれぞれの記録単位数の割

合およびがん看護経験年数群別の割合を比較検討した。

(2) ピアサポートニーズの把握

- ① 対象：がん専門病院において、がん患者・家族の看護に従事している看護師のうち、調査の趣旨を説明し、同意の得られた8名。
 - ② データ収集方法：データは、看護チームのピアサポートに希望あるいは期待する内容や課題について、フォーカスグループインタビューの手法により収集した。グループは、対象の自由な語りを妨げない配慮として、メンバーの年齢や経験特性を考慮して設定した。インタビューは1時間程度実施した。
 - ③ 分析方法：インタビュー内容を記述データ化し、重要アイテムを抽出、類型化した。
- (3) 倫理的配慮

(1)(2)の調査にあたり、研究実施施設の倫理委員会の承認を得た。また、対象者には、調査への協力は自由意思であり、協力を断っても不利益を受けないこと、情報は個人が特定出来ないように記号化し、研究目的以外では使用しないことなどを文書・口頭で説明し、同意書への署名により承諾を得た。

4. 研究成果

(1) ピアサポートの実態把握

① 認識しているサポート内容について

がん看護に従事する看護師のがん患者・家族への看護実践におけるピアサポート内容は、「提供された」および「提供した」と認識している内容それぞれ5カテゴリーが形成された。形成されたカテゴリーは、【看護実践の向上を促進する支援】、【看護実践や業務遂行の円滑化に向けた実践的な支援】、【看護実践や（存在価値）役割機能に対する評価のフィードバック】、【協働を推進する関係性と環境づくりの促進】、【感情コントロールの促進に向けた支援】である。これらは、「提

供された」および「提供した」と認識している内容で類似し、概ね共通したカテゴリーを形成した。(表1・2)

表1：提供されたと認識している内容

サブカテゴリー	記録 単位数	カテゴリー
自己の知識や技術の獲得を促す指導をしてもらう	10	看護実践の向上を促進する支援
がん看護ケアを実践する上で役立つ情報を提供してもらう	41	
看護ケアで困難に直面した時に、解決につながる具体的な示唆をもらう	89	
看護ケアや業務の不足・改善点に気づきかけをもらう	18	(17)記録単位
看護ケアや業務の失敗からの学びを後押ししてもらう	6	
専門性の強化に向けた動機づけをもらう	7	
自己の抱える看護ケアや業務の負担軽減に向けた実践をしてもらう	34	看護実践や業務遂行の円滑化に向けた実践的な支援
看護ケアの実践が困難な時にケアを代行してもらう	13	
看護ケアの実践が困難な時に一緒にケアを実践してもらう	9	
看護ケアや業務の不足部分を補ってもらう	28	(84)記録単位
実施した看護ケアや業務を認めてもらう	17	看護実践や存在価値、役割機能に対する評価のフィードバック
自分の存在や活動を認めてもらう	9	
自分の仕事の力量を認めてもらう	12	
自分の計画した看護ケアに賛同してもらう	10	(48)記録単位
円滑な看護ケアを実践するために人間関係を調整してもらう	17	協働を推進する関係性と環境づくりの促進
看護ケアや業務が協力して実践できるように配慮してもらう	62	
職場環境が居心地良くなるように配慮してもらう	16	
表出した気持ちを受けとめてもらう	27	感情コントロールの促進に向けた支援
看護ケアを実践するなかで生じた気持ちに共感してもらう	15	
気持ちが軽くなるように配慮してもらう	18	
支えられている安心感をもらう	20	(80)記録単位
		総記録単位数 478

表2：提供したと認識している内容

サブカテゴリー	記録 単位数	カテゴリー
知識や技術の獲得を促す指導をする	30	看護実践の向上を促進する支援
がん看護ケアを実践する上で役立つ情報を提供する	9	
看護ケアを実践する上での具体的な示唆を与える	25	
看護ケアや業務の不足・改善点に気づきかけをつくる	22	(92)記録単位
看護ケアや業務の失敗からの学びを後押しする	6	
看護ケアや業務の負担軽減に向けて実践する	37	
看護ケアの実践が困難な時にケアを代行する	8	看護実践や業務遂行の円滑化に向けた実践的な支援
看護ケアの実践が困難な時に一緒にケアを行う	4	
看護ケアや業務の不足部分を補う	4	
実施した看護ケアを認めて伝える	17	看護実践や役割機能に対する評価のフィードバック
立場や役割を認めて伝える	1	
実施した看護ケアの協力に対して感謝を伝える	3	
円滑な看護ケアを実践するために人間関係を調整する	16	協働を推進する関係性と環境づくりの促進
看護ケアや業務が協力して実践できるように配慮する	36	
職場環境が居心地良くなるように配慮する	12	
気持ちの表出を促し受けとめる	13	感情コントロールの促進に向けた支援
気持ちが軽くなるように働きかける	18	
		総記録単位数 261

また、「提供された」および「提供した」と認識しているサポート内容は、両側面とも記録単位数割合の高い順に同じカテゴリーな並び、【看護実践の向上を促進する支援】が最も多く、反対に、【看護実践や存在価値、役割機能に関する評価のフィードバック】が最も少なかった。

以上により、がん看護に従事する看護師は、仲間から肯定的に提供されたと知覚したサ

ポート内容を仲間に対して提供していると考えられる。そのため、看護師のサポート知覚を促進するような支援の必要性が示唆された。看護師支援としては、本研究で明らかになったがん看護に従事する看護師が肯定的に認識していたピアサポート内容を具体的に提示するとともに、意識化されにくい【看護実践や存在価値、役割機能に関する評価のフィードバック】を促し、サポートの行動化を動機づける支援が必要である。

②がん看護経験年数による比較

がん看護経験年数を、経験5年以下、経験6年以上10年以下、経験11年以上15年以下、経験16年以上の4群に分類し、構成する平均記録単位数の割合を比較検討した。

その結果、4群の全てにおいて、ピアサポート内容の【看護実践の向上を促進する支援】の記録単位数の割合が上位を占めた。また、経験15年以下の全て群では、【看護実践や(存在価値)役割機能に対する評価のフィードバック】の記録単位数の割合が少なく、これは、「提供された」と「提供した」の両サポート内容で同じ結果であった。さらに、16年以上の群で最も記録単位数の割合が少なかったカテゴリーは、「提供された」サポート内容では【協働を推進する関係性と環境づくりの促進】、「提供した」サポート内容では【看護実践や業務遂行の円滑化に向けた実践的な支援】であった。

がん看護に従事する看護師のピアサポート内容では、経験年数に関わらず、【看護実践の向上を促進する支援】という道具的サポートに関する記録単位数の割合が多く、また、【看護実践や(存在価値)役割機能に対する評価のフィードバック】という情緒的サポートの記録単位数の割合が少なかった。そのため、がん看護に従事するピア同士が意識的に相互評価し合える環境整備の必要性

が示唆された。

(2) ピアサポートニーズの把握

インタビュー内容から、がん看護に従事する看護師は、肯定的なピアサポートを実現する前提として、業務の複雑化や煩雑化およびマンパワー不足による負担軽減に向けた「看護師の精神的および時間的余裕を支える支援」を求めている。これは、自分自身の責任業務をこなすだけで精一杯で、周囲に目を配る余裕がない、周囲に目を配ると自分の責任業務が滞り、時間外が増えるという自覚が、ピアサポートの阻害要因となっていることに起因したニーズであった。

また看護師は日常のがん看護実践を通して、ピアから学ぼうとする姿勢やピアを信じる姿勢、ピアとともに課題を向き合う姿勢など「看護師のピアサポートを利用する力の強化」が必要であると感じていた。これは、プライマリナーシングが展開される中で、本来「一人の患者を一人の看護師が一貫して受け持ち、責任を持って看護過程を展開することで、患者個々のニーズに合わせた、質の高い看護を提供することを期待したシステム」であるプライマリが、一部の看護師の中で、個人完結型、個人責任型の思考へと偏った解釈につながり、それがチーム全体に大きく影響していることに起因したニーズであった。一人で頑張っている看護師が、閉鎖的に看護をこなすのではなく、周囲には支える準備のあるピアが存在することを自覚し、困った時にはチームのピアに相談し、共に問題解決できる力を育むことの重要性を感じていた。そして、サポートは、提供するもの、提供されるものの一方的なものではなく、相互行為であるため、サポートを通してのピアの相互のつながりの意識化の作業も必要である。

さらに、がん看護を実践する中で、看護と

いう共通の話題による意識的なコミュニケーションの充実と、目標や課題をチームで成し遂げ、共に看護を楽しむという体験の蓄積といった「ピア同士がともにきずなを深める体験の共有」が挙げられた。これは、ピア同士で作上げる病棟のイベントなどの企画・運営や、支援の困難な事例を共有し、チーム全体で一体となって問題解決に向けて関わった等の体験を蓄積することで、チームやピア同士の距離を縮め、チームの一員であるという自覚を高めることにつながると感じていた。

そして看護チームのサポートが円滑に展開するためには、チームの中で自ら率先して支持的なピアサポートを実践する個人あるいは小集団の「支持的なピアサポートを実践するロールモデルの存在」が不可欠であると感じていることが明らかになった。これは、2～4名の小グループでもチームの中で支持的なピアサポートを実践する看護師の存在が、チーム全体のピアサポートの意識化につながり、ピアサポートを実践するロールモデルの存在が、実際のサポートのヒントとなる可能性が示された。そして、病棟の管理者の意識もピアサポートの促進には重要な意味合いを持つことが語られ、病棟全体をサポートティブな雰囲気へ導くためには、管理者の考え方、姿勢が看護師個々の行動を後押しする意味でも重要であると感じていた。

(3) ピアサポートプログラム試案作成に向けての課題

本研究を通して、がん看護に従事する看護師のピアサポートを充実させるためには、看護師が相互に支えあえる環境の整備とともに、個々の看護師がチームメンバーであるという自覚を高め、ピアによる支援を保証し、肯定的なサポートの具体的内容の例示などを含む支援教育の充実と、ピアサポートを牽

引するサポートリーダーの育成などのピアサポートプログラムの実践が必要であることが示唆された。

今後は、ピアサポートニーズ把握に向けて、がん看護の経験年数や病院／病棟における役割機能別に小集団を形成し、グループインタビューを実践し、対象の特性によるニーズの比較検討していく必要がある。そして、より具体的な支援策を検討し、導かれたサポートプログラムを院内教育の中で活用し評価しながら、継続的に支援していく必要がある。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計0 件)

[学会発表] (計1 件)

- ①樋口友紀、がん看護に従事する看護師のピアサポート内容—がん看護経験年数による比較—、第24回日本がん看護学会学術集会、2010.2.13、静岡

6. 研究組織

(1) 研究代表者

樋口 友紀 (HIGUCHI YUKI)

群馬県立県民健康科学大学・看護学部・講師

研究者番号：20341802

(2) 研究協力者

①二渡 玉江 (FUTAWATARI TAMAE)

群馬大学・医学部保健学科・教授

研究者番号：00143206

②櫻井 通恵 (SAKURAI MICHIE)

群馬県立がんセンター 看護師 (CNS)